

まえがき

NPO 法人東京都自閉症協会は 2017 年に設立 50 周年を迎えた。その 50 周年事業の一つとして、自閉症を含む発達障害に関し、その親や当事者と、精神科医師などの医療関係者との良好な関係作りの一助にするため、主に会員に向けてアンケート調査を行った。その結果、429 件もの回答を得た。精神科医療への関心が非常に高いことが分かった。

とくに、自由記述には、保護者、当事者本人、支援者のこれまでの体験とそれに基づく意見が数多く書かれていた。これだけ多くの体験、意見が寄せられるとは、調査スタッフも想定外であった。それは、保護者や当事者の思いからであろう。自らの経験が多くの人に有益だと考えて、披露していただけたのだと思う。貴重な資料となっている。本調査結果は、とくに診断を受けたばかりの人や、小さいお子さんの保護者にとって、先の見通しをつけるために有益だと確信する。また、精神科医師に何を伝えれば良いのかの例として参考になると考えます。

協力いただいた皆様に、こころより感謝します。

調査方法

2017 年 10 月に NPO 法人東京都自閉症協会の会報送付先（会員約 1200 名と定期購読者約 100 名）にアンケート用紙（資料）を配付した。また、ネットで回答できる仕組みも活用した。アンケートでは、問題の実情を把握するため、自由記述欄を設けた。

回答総数 429 件：429 件中、ネット回答 56 件（429 件中、当事者本人が回答 25 件）

精神科薬を服薬していないなど、精神科医に定期的に通っていない人の多くは、アンケートに回答しなくてよと判断したと思われる。そのため、回答者の多くは精神科医療を現在または過去に受けていた人と推察される。

目 次

第1章	アンケート結果に対するインタビュー	5
第2章	選択回答部分の分析結果	37
第3章	自由記述の分析結果	43
第4章	自由記述集	59
資 料	アンケート用紙	149

調査結果要旨

今回の調査結果から次のようなことが分かった。

- ① 非常に多くの方が、かかりつけ精神科医に感謝している。
- ② 精神科医には親身になって成育を見守り、応援して欲しいのであり、その姿勢・言葉が薬以上に患者を救っている。
- ③ 障害年金など、面倒な公的書類の作成に関して、医師に感謝している。
- ④ 医師選びが重要であり、良い医師を選ぶための情報が望まれる。しかし、質的にも量的にも不足しており、見つからない、待たされる。
- ⑤ 成人を対象にした精神科医の質的な差が大きい。
児童精神科医に比べ、成人を対象にした精神科医のほうが、自閉症を含む発達障害に対する知識と姿勢に問題があるケースが多い。ごく一部に患者の心を傷つける医師がいる。
- ⑥ ④、⑤も関係し、児童期の医師から成人期医師への引継ぎに課題がある
- ⑦ 医師に学校や事業所、職場への働きかけ（ソーシャルワーク）を期待している。
- ⑧ 現行の医療制度では、ニーズに対し、精神科医療機関の時間的、経営的保障が不十分なのではないか。（次頁）
- ⑨ 精神科薬の評価では、服薬によって助けられたという体験が多いっぽうで、一定数、服薬で状態が悪くなったという体験が報告されている。このことをどう考えるか。（てんかんや、多動・衝動ではなく、抗精神病薬にまつわることではないかと推察される。）
- ⑩ 減薬や抜薬のニーズが高く、一生飲み続けることへの不安が大きい。

医師不足問題と事務的業務負担

とくに、発達障害児者に対応する能力のある医師の不足問題は深刻である。

精神科医師の業務の増大には次の背景がある。

- ① 福祉制度等が整備されたことによる公的書類事務の増大
- ② 対象生徒の増大
(特別支援学校・学級、通級の知的・発達障害の生徒は5年間で1.4倍)
- ③ 発達障害がマスコミ等で話題になり診断を受けようとする人の急増

このほかに、教育、福祉との連携などで駆り出されることが増加。

公的書類の作成（少なくとも以下がある）

- ①障害年金・特別児童扶養手当の申請・更新時の診断書
(障害年金では無期が減り、更新周期が短くなっているという声をよく聞く)
- ②精神障害者保健福祉手帳 or 愛の手帳（知的）の診断書
- ③障害福祉サービスの区分認定の医師意見書
- ④自立支援医療（精神）の医師意見書
- ⑤成年後見制度申し立ての診断書
- ⑥その他（診療情報提供書など）

現状、医師は書類作成に追われる毎日であり、量も多く、しかも「手書き」で要求されることもあるため、作業効率が著しく悪い。

対応できる医師の養成を強化しても到底間に合わない。本人・保護者への直接支援時間を確保するためには、まず、事務的業務の負担軽減を早急に図らねばならない。